

令和 5 年 5 月 21 日現在

機関番号：31310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K10469

研究課題名(和文) 青年期の小児がんサバイバーのセルフケアを支援する看護支援モデルの開発

研究課題名(英文) Development of a Nursing Support Model to Support Self-Care for Adolescent Childhood Cancer Survivors

研究代表者

大池 真樹(OHIKE, MAKI)

東北文化学園大学・医療福祉学部・准教授

研究者番号：70404887

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、青年期の小児がんサバイバーのセルフケアを支援する看護支援モデルを開発することを目的とした。そのため、発症時の発達段階、発症時からの病気体験とセルフケアの積み重ねに着目したセルフケアタイプ分類、青年期のセルフケア支援に必要な要素の抽出を試みた。結果、「健康管理」と「社会生活」に着目した青年期の小児がんサバイバーのセルフケアタイプは3つに分類され、セルフケア支援は、晩期合併症を抱えながら就職や結婚などライフイベントに自分らしく対処できるよう、長期フォローアップ継続への支援、情報提供や他者への伝え方など、ライフイベントへの向き合い方に関する相談など心理的支援の必要性が抽出された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により明らかになった青年期の小児がんサバイバーのセルフケアタイプ、ならびにセルフケア支援は、晩期合併症を抱えながらライフイベントに適応し、社会生活を営む青年期の小児がんサバイバーのセルフケア支援の一助になりえたと考える。青年期のライフイベントとして就職や結婚に対して、晩期合併症を抱えながら自分らしく生活するために、長期フォローアップ継続を支援しつつ、適切な時期に適切な情報提供や他者への伝え方など、ライフイベントへの向き合い方に関する相談など心理的支援の必要性が明らかになった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to develop a nursing support model that supports the self-care of adolescent childhood cancer survivors. Therefore, we attempted to (1) classify self-care types focusing on developmental stage at onset, experience of illness from onset and accumulation of self-care, and (2) extract elements necessary for adolescent self-care support. As a result, focusing on "health management" and "social life", the self-care types of adolescent childhood cancer survivors were classified into three types. Counseling and consultation on how to face life events, such as support for long-term follow-up continuation, information provision and communication to others, were extracted so that they can cope.

研究分野：小児看護学

キーワード：小児がんサバイバー 小児がん経験者 青年期 セルフケア 病気体験

1. 研究開始当初の背景

がんの治療は進歩し、多くのがんは慢性疾患として位置づけられ、がんサバイバーへの支援は、がん発症に伴う体験を経て、がんと共にどのように生きていくか、という視点からの支援が求められている。小児がんにおいても例外ではなく、近年、小児がんサバイバーの多くが長期生存者となり、晩期合併症や医療 PTSD、健康の自己管理の問題が挙げられる中、平成 29 年度策定予定の第 3 期がん対策推進基本計画では、「共生によるがんの克服」が掲げられ、小児や AYA 世代などライフステージに応じたがん対策の強化が予定されている。以上、青年期の小児がんサバイバーが、「共生によるがんの克服」を目指しながら、晩期合併症や医療 PTSD、健康の自己管理の問題を解決するために、下記の視点が重要であると考えた。

青年期の小児がんサバイバーは、小児期にがんを発症し、青年期に至るまで、病気体験やセルフケアを積み重ね、且つ、学校や社会生活において、病気を発症していない他児や教員、進学や就職後の人間関係の中で、各発達段階におけるライフイベントを経験している。そのため、青年期の小児がんサバイバーに対する看護支援として、発症時の発達段階、各発達段階において経験の積み重ね（病気体験、セルフケア）に着目した看護支援が有効であると考えられた。具体的には、平成 29 年度までの研究結果から、発症時の発達段階により、その後の病気体験やセルフケアが大きく影響しており、幼児期発症事例は、入院中の記憶は曖昧なまま、病気や治療の影響により自分の力ではどうにもならない体験が続き、青年期では、病気を否定的に捉え、習慣的・選択的に健康を管理していた。一方、学童期発症事例は、親や医療者からサポートを受け、病気説明の内容を理解しながら自分なりに対処し、青年期では、病気を受け入れ、病気について伝えながら学校生活や仕事、自助グループ活動を継続していた。また、退院後から、主体的に晩期合併症を管理していた。中学生発症事例は、発症前までの生活との違いにより、大きな衝撃を受けていた。また、周りから特別扱いされ続けたことも影響し、自信や気力がなく、習慣的に外来を受診していた。主体的に健康を管理し、仕事や自助グループ活動など社会生活を継続していた事例も、退院後も思うように生活できないことや対人関係の悩みから、精神面の治療を続けていた。以上より、青年期の小児がんサバイバーに対して画一的な支援を実施しても効果は得られにくく、発症時の発達段階や発症後から青年期に至るまでの経験の積み重ねに着目した支援が有効であることが示唆された。

2. 研究の目的

本研究は、発症時の発達段階、発症時からの病気体験とセルフケアの積み重ねに着目し、青年期の小児がんサバイバーのセルフケアを支援する看護支援モデルを開発することを目的とした。

3. 研究の方法

1) 青年期の小児がんサバイバーを対象とした面接調査のデータ分析とまとめ：各事例から、入院中から治療終了後、青年期に至るまでの病気体験とセルフケアの特徴を明らかにし、セルフケアタイプ分類、セルフケアの特徴を明確化する。

2) 青年期の小児がんサバイバーのセルフケアモデル原案作成に向け、先行研究に文献検討の結果を反映させ、セルフケアタイプとセルフケア支援に必要な要素を抽出した。

日本国内における 2017 年から 2022 年 4 月までの文献を対象とした。検索エンジン「医学中央雑誌」Web にて「小児がんサバイバー」「小児がん経験者」をキーワードとして文献検索を実施した。対象文献を精読し、青年期の小児がんサバイバーの現状と課題が記載されている 64 件を分析対象とした。

4. 研究成果

1) 青年期のセルフケアタイプ分類

「青年期の小児がんサバイバーへの面接調査」データをまとめ、論文作成・論文投稿を実施した。青年期のセルフケアタイプの分類と各タイプのセルフケアの特徴が明らかとなり、青年期のセルフケア支援において、発症時の発達段階や青年期に至るまでの病気体験とセルフケアの積み重ねに着目することの必要性が明示されたことが成果として挙げられた。

具体的には、青年期にある小児がんサバイバーのセルフケアとして、健康管理は外来受診と晩期合併症に対する日常生活上の自己管理、社会生活への適応は学校や職場で周囲の人々に病気について伝えること、体調に合わせて学校生活や仕事を調整することが抽出され、【主体的な健康管理】または【習慣的・選択的な健康管理】、【主体的な社会生活】または【消極的な社会生活】それぞれの組み合わせでセルフケアタイプが 3 つに分類された。青年期のセルフケアタイプ 1 は、病気を理解できないことや自信のなさから【習慣的・選択的な健康管理】と【消極的な社会生活】であった。タイプ 2 と 3 は、病気について理解したことを基に難しさを感じながらも入院生活や社会生活に対処し【主体的な社会生活】を実施していた。また、タイプ 2 は【主体的な健康管理】であったが、タイプ 3 は晩期合併症の発症がないことが影響し【習慣的・選択的な健康管理】を実施していた。

2) セルフケアの特徴

タイプ 1 は幼児期発症事例と中学生発症事例が含まれた。タイプ 1 の幼児期発症事例は、病気を理解できない状況や病気を否定的に捉えることが多い状況の中で、常に我慢や無理をし続

けながら青年期に至り、青年期では病気や治療の影響について自ら話や相談はせず、習慣的に外来を受診したり、仕事の休みが合わない時は受診しないなど、習慣的・選択的または消極的なセルフケアを実施していた。タイプ1の中学生発症事例も治療の説明はよく分からなかったと病気を理解できない状況が続き、みんなと違う自分に自信や気力がない状況が続き、青年期でも晩期合併症について疑問を抱きつつも医療者に相談することや結婚をあきらめるなど、習慣的・選択的または消極的なセルフケアを実施していた。

タイプ2は学童期発症事例と中学生発症事例が含まれた。学童期発症事例は、病気を理解した上で、治療による苦痛を我慢しながらも、友人と関わりながら入院生活や学校生活に自分なりに対処し、青年期でも医療者や小児がんサバイバーからのアドバイスを基に晩期合併症の日常生活上の自己管理、必要時、職場で病気を伝えるなど主体的なセルフケアを実施していた。中学生発症事例は、発症前までの生活との違いによる衝撃や今までできていたことができなくなった衝撃を受けながらも、医師に症状を伝え質問や相談をしながら病気や治療を理解し、治療を決断するなど主体的に治療に参加していた。青年期では精神面の治療を継続しながら、自助グループ活動に参加し、病気への思いが整理されたと感じたり、自ら医師に症状を伝え質問や相談したり、病気の伝え方を工夫しながら体調と勤務を調整したりと、主体的なセルフケアを実施していた。

タイプ3は学童期発症事例(1事例)であった。タイプ2の学童期発症事例と同様に、入院中は治療による苦痛を我慢しながらも入院生活に自分なりに対処できていた。しかし、健康管理については、青年期に至るまで明らかな晩期合併症の発症がなく、寛解10年目で再発の確率はゼロに近いと、外来受診を中断し、習慣的・選択的な健康管理となっていた。

3) セルフケア支援について

青年期のセルフケアタイプは、発症時の発達段階や青年期に至るまでの病気体験とセルフケアの積み重ねの違いにより異なり、青年期のセルフケア支援では、発症時の発達段階や青年期に至るまでの病気体験とセルフケアの積み重ねに着目することの必要性が示唆された。

4) 青年期の小児がんサバイバーのセルフケアモデル原案作成に向けた文献検討

国内の過去5年間の青年期の小児がんサバイバーのセルフケアに関する文献を医学中央雑誌より収集し、小児がんサバイバーのセルフケアに関する現状について概要を整理した。長期フォローアップや成人診療科への移行支援が実施され成果が得られている一方、晩期合併症に対するフォローアップを継続する上で、病気との向き合い方やフォローアップの継続、成人診療科への移行支援は課題が残っていた。青年期における小児がんサバイバーのセルフケア支援に必要な要素として、晩期合併症を抱えながら就職や結婚などライフイベントに自分らしく対処できるよう、長期フォローアップ継続を支援しつつ、適切な時期に適切な情報提供や他者への伝え方など、ライフイベントへの向き合い方に関する相談など心理的支援の必要性が抽出された。

【長期フォローアップの継続や成人診療科への移行支援における課題の具体例】

- ・長期フォローアップの中断や成人診療科への移行困難
- ・長期フォローアップ体制やツール充実の必要性
- ・治療後のリプロダクティブヘルスに関する専門的なフォローアップ体制の確立

【青年期における小児がんサバイバーのセルフケア支援に必要な要素の具体例】

- ・小児がんサバイバーのヘルスリテラシー獲得のための患者教育や自尊心の育み
- ・発症時の発達段階の特徴や病気との向き合い方を把握し、個人が退院後に抱える困難への支援を継続的にライフステージに沿って実施する
- ・活動や社会参加に応じた継続的な体力への支援
- ・妊孕性の状態に関する情報提供やパートナーへの伝え方など個人の悩みに応じた心理的支援
- ・小児がん経験者の就労継続のために、晩期合併症に応じた健康や体調管理をしながら、定期受診や業務上の配慮など職場の理解やサポートが必要
- ・疾患理解の過程とセルフケアの現状および成長過程で生じた親子の体験を尊重した家族支援

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 大池真樹, 武田淳子, 小野幸子, 大塚真理子	4. 巻 80(1)
2. 論文標題 青年期にある小児がんサバイバーのセルフケアと青年期に至るまでの病気体験ならびにセルフケアの積み重ね	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 小児保健研究	6. 最初と最後の頁 29-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	武田 淳子 (TAKEDA JUNKO) (50157450)	宮城大学・看護学群・教授 (21301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関